

▼『東方』302号より

一 殺人がなかったら、歴史はない——実証に徹した評伝

▲ 神谷 忠孝

『東方』三〇二号より

殺人がなかったら、歴史はない

——実証に徹した評伝

神谷 忠孝(北海道文教大学)

草野心平は「怪物武田泰淳」(『武田泰淳全集』第二巻・月報2)で、〈かねがね私は武田泰淳を一種異様なモンスターと思っていた〉と書いている。本書は、従来指摘されてきた武田泰淳のとらえどころのなさを何とか解明しようとした意欲的な本である。その方法として著者は、作品のモデルを可能な限り探りあて作者と作品の関係を明らかにしている。

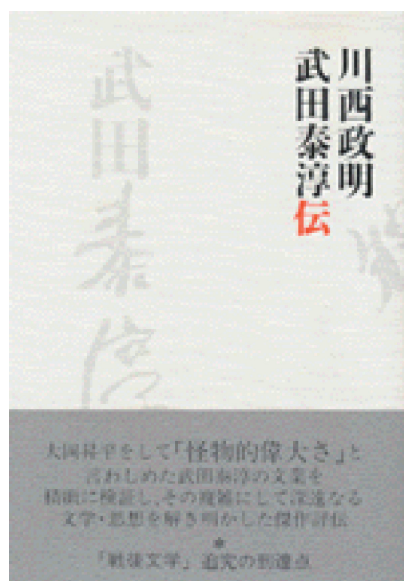
本書で一番読ませるのは、泰淳の「原罪」ともいうべき核心を中国体験に探ったところである。巻末の年譜「昭和十三年」に、〈四月、揚子江沿岸から南京をへて徐州会戦に参加した。この徐州会戦中の「五月二十日午後」に小説『審判』で告白した不幸な事件が発生した〉という記述がある。『審判』(『批評』一九四七・四)は、「私」杉が終戦後の上海で知り合った日本人青年「二郎」から戦場で中国人を殺したことを告白する手紙を受け取る小説である。一回目は他の日本兵とともに中国の百姓男を射殺し、二回目は自分の意思で無抵抗の盲人老夫を殺した話で、それが「五月二十日の午後」であった。このことについて著者は、〈泰淳は国家の名において許された戦場での殺人にも、個人の責任は存在すると考えた人である。この考えは第二次世界大戦が終わるまでなかった思想である。泰淳は上海で個人の責任と神の裁きを信じた。ここに武田文学の骨格が

トップページにもどる

川西政明著編

『武田泰淳伝』

四六判・五二二頁・講談社・二、九四〇円



できた〉と書いている。

さらに、泰淳が亡くなる二、三年のことに触れている。埴谷雄高の家に泰淳と竹内好の三人が集まったとき、竹内が「五月二十日の午後」の出来事は事実か否かを聞いた。それに対し、〈泰淳は否定も肯定もしなかった。ただ黙っていた。それは当然である。泰淳は「五月二十日の午後」の事実にと「我慢」をしており、沈黙するほかなかっただろう。泰淳が明確に否定しなかったのも、うーむと大きく唸ったまま好は「五月二十日の午後」の出来事を事実と認定した〉と書いている。三人が会った翌日、川西氏は埴谷邸に呼ばれ会談の内容を聞かされた。〈聞かされた以上、いつか書くことになると思うが〉と確認したところ、埴谷は書いてもよいと答えた。

以上が本書ではじめて明らかにされた泰淳の秘密である。川西氏は長年にわたり編集者として文学者たちと交友して

きた人なので信頼されていたからこそ聞けたのである。
「五月二十日の午後」が事実と認定されたことの意味は大きい。つまり、『司馬遷』や戦後の『蝮のすえ』『ひかりごけ』を書かずにはおれなかった作者の内的必然性が説明できるからだ。

本書は「伝」にふさわしく時代順に記述されている。青春時代の出来事で重要なのは浦和高校から東大入学の部分である。一九三一年四月、東京帝大文学部支那文学科に入学してすぐの五月三十日、泰淳は東京中央郵便局へ鉄道通信従業員のゼネストを呼びかけるビラまきに出かけて検挙され一カ月ほど本富士署に拘留された。翌年三月に中退している。一九三四年、同期入学の竹内好に「中国文学研究会」に誘われて入会。その翌年、来日した中国の女性作家謝冰瑩にアパートを紹介したりして親しくなるが、謝冰瑩は国際共産主義の資金ルート画策の嫌疑を受けて拘留ののち帰国した。この事件を最後に泰淳は左翼運動から離れた。一九三七年十月に召集令状を受け取り、近衛師団近衛歩兵第二聯隊の補充兵として入隊。十一月五日杭州湾着。十二月、杭州の衛生材料廠に配属された。そして翌年の「五月二十日の午後」を体験することになる。

一九四六(昭和二十一年)二月十一日に上海を出港し、十三日に鹿児島に着いた高砂丸で引き揚げた泰淳は、四月に西光寺の住職になる。夏、上海時代から知り合いの中山怜子との恋愛が始まる。怜子には中山信という夫がいるのだが、堀田善衛を交えての「不思議な四角関係」に発展してゆく。これについては小説『愛』のかたち』の詳細なモデル考察を展開している。この恋愛のさなか、泰淳は北海道大学に新設された法文学部に招請された。一九四七年六月に講師の発令があり、十月八日に助教授の発令が出た。

トップページにもどる

その二日後、横浜中華街で鈴木百合子と会い、百合子の祖父が大正時代に日本を騒がせた殺人事件の被害者鈴木弁蔵であることを知った。そのあと札幌に赴任し、「支那文学史概説」の講義を担当したが十二月二十三日に辞表が受理され免官となっている。わずか三カ月で教師生活を打ち切った理由はよくわからないが、怜子との恋愛、百合子との出会いなどが創作意欲を増進させたとも考えられる。怜子は離婚した堀田善衛と結婚して泰淳と怜子の恋愛は破綻した。

『司馬遷』(昭和十八)と「大東亜戦争と吾等の決意(宣言)」(昭和十七)を書いた竹内好を比較して、「好の二元論と泰淳の二元論(あるいは多元論)」といわれる思想の分れ目は、三七(昭和十二年)年からはじまった二人の中国体験にあった」と述べ、『司馬遷』の主題について、「彼は一つの絶対がいままでもつづくことを信じなかった。だが絶対が存在することは、信じないわけにかなかった。その絶対とは「殺人がなかったら、歴史はない」(「作家に聴く・武田泰淳」と語ったものだといえる)」ととらえることで、戦後の『審判』と関連させている。

「殺人がなかったら、歴史はない」というフレーズはキーワードとして用いられ『蝮のすえ』分析にも応用されている。そして「鈴弁事件」が詳述される。一九一九(大正八年)六月十四日の新聞号外の見出しは「稀代の大犯罪 山田農商務技師等、鈴弁主人を惨殺す」というものであった。六月六日、新潟県の新潟川河底から頭部と両足を切断された男の死体を詰めたトランクが発見された。やがて身元が判明し、東京帝大農科大学出身で農商務省勤務の山田憲とその仲間が逮捕された。著者は当時の新聞や裁判記録をもとに事件の概要をあきらかにしている。金融業を営む鈴木

弁蔵は、泰淳が一九四八年から同棲していた鈴木百合子の祖父であった。

「鈴弁事件」にこだわった理由は、小説『ひかりごけ』を論ずるところで説明される。一九四四年十二月、根室を出港した船が航行不能となる。翌年二月、船長だけが生還した「人食い船長事件」を題材にしたのが『ひかりごけ』である。著者は泰淳の取材旅行を追跡しながら「鈴弁事件」との類似点にも触れている。著者は、〈この『ひかりごけ』を書いたことで、泰淳という作家が本当の意味で誕生したのである〉と述べ、泰淳の執筆意図を、〈殺人、人肉食をおかしてまで生き延びた人間が、生きることの苦しみに耐え、我慢することなのだ。泰淳はそうわれわれに語りかけている〉ととらえている。

『森と湖のまつり』は、北大法文学部の同僚であったアイヌ民族出身の言語学者知里真志保を訪ねたことが機縁となつてうまれた作品である。当初は知里真志保をモデルにしようと考えていたようであるが、日本人のアイヌ研究者と知里の関係が険悪であることがわかつて断念したようである。おりしも、詩人でアイヌ研究家の更科源蔵が日本人学者たちを道東のアイヌコタン探訪に引き連れていったことを知り、泰淳は汽車で追いかけた。著者は更科の夫人更科千恵さんから源蔵の「NHK手帳」をコピーしてもらい、当時の列車時刻表をもとに克明に泰淳の足跡を確認している。『森と湖のまつり』でも著者が注目するのは一太郎というアイヌ人が網元の網にダイナマイトを仕掛ける場面である。著者はそこで、〈泰淳の小説には、矛盾が集積し、関係が複雑化してくると、暴力が顕現して変化することが多い〉と述べている。

『蝮のすゑ』『愛』のかたち』『風媒花』『ひかりごけ』『森

トップページにもどる

と湖のまつり』などの作品に貫流している暴力、殺人というテーマには、〈一対一で人を殺し、傷つけることの必死さ、人間らしさが、一つひとつの小説に受け継がれ連鎖のかたちをとっている〉と書いていることで、戦後文学における武田泰淳の独自性を確認しているようだ。戦争を体験した日本の戦後文学で文学者たちが追求したヒューマニズムが次々に有効性を失ったなかにあつて、泰淳はアンチヒューマニズムの側から問題提起し続けたということである。大岡昇平が『野火』で人肉食を食べなかった日本兵にヒューマニズムを描いたのに対し、泰淳が『ひかりごけ』で批判し加害の痛みを対置させたのである。「神」に近いのはどちらか、と。

泰淳が最終的に希求したものについての著者の見解は、『富士』に「存在の革命の集大成」を読み取っているところを示されている。晩年にニヒリズムから解放された泰淳の心境を『快楽』や『わが子キリスト』で説明している。

二十一世紀に噴出してきたテロや戦争に対して、どのように人類をとらえかえせばよいかを考えようとするとき、武田泰淳が提起した「殺人がなかったら、歴史はない」というフレーズを再検討してみるのも有効ではないか。本書からそのようなメッセージが伝わってくる。